

地域で学び、地域と共に歩む松本大学の今。

松本大学学報

sokyu 蒼穹

2015.12 Vol.121



硬式野球部が少年野球教室を開催(詳しくはP19をご覧ください)

特集

大学職員のレベルアップへ団結 ～本学で「大学人サミット」開催～

..... P.02

- 教育学部・学校教育学科設置に向けて P.04
- 中条地域の活性化へ学生が連携・協力 P.06
- 「信州アルクマそば」がフード・アクション・ニッポン アワードで入賞 P.06
- 「大学COC事業」による最近の取り組み
高校で初の出張実験教室を開催 P.08
- 第6回「松本大学地域貢献大賞」が決定 P.14 ほか

大学職員のレベルアップへ団結

～「第9回大学人サミット」本学で開催～

11月7日と8日の2日間にわたり、本学で「第9回大学人サミット信州・まつもとカレッジ2015」を開催しました。大学人サミットは全国の大学人が国公立の枠を越えて共に集い、魅力ある大学づくりに向けて語り合う参加型シンポジウムです。全国各地から大学教職員や学生など90名を超える参加者を迎え、「地域の地域による、地域のための、大学人サミット」をテーマに掲げ、互いに刺激し合い、大きな成果を得ました。

松本大学事務局長・第9回大学人サミット実行委員長 柴田 幸一

本学では、SD(スタッフ・ディベロップメント=大学職員の資質向上のための取り組み)の意味合いを色濃く出しながら大学人サミットの準備に取り組んできました。中堅・若手職員を中心としたプロジェクトチームが実質的にスタートしたのは、2月の職員会議からでした。それから約8ヵ月、プロジェクト会議の回を重ねるごとに、従来のサミットを進化させ、「松本大学らしい大学人サミット」の形を追求する声が自然発生的に高まってきました。

それぞれのイベントの責任者とスタッフを決めたところから全員が主体的に企画に関わり、誰もが主役になり、それぞれの立場で「松本大学らしさ」を如何に表現するかに意を用いるようになりました。このことは、全国からの参加者に対して、松本大学の職員や学生の輪郭をはっきり見せることで、自分たちが心から愛し、誇りに思う松本大学



を深く知らせたいという思いの現れであり、その強い思いがそれぞれの企画をじわじわと本学らしい色に染め上げていく格好になりました。まさにその過程こそが、「松本大学職員の学びの姿勢の宝物」として、一人ひとりの「丹田」(たんでん:気が集まる体の場所)にしっかりと蓄積されました。

閉会式の会場では、互いへの感謝の言葉が行き交い、参加者の表情には充実感が溢れていました。全国の大学人に対する松本大学からの「ありがとう」に始まり、全国の大学人・学生と本学職員・学生の全員が主役を演じ、互いの「ありがとう」で幕を閉じた松本大学らしい大学人サミットとなりました。

松本大学の「結束」と「魂」を感じた2日間

キャリアセンター・第9回大学人サミット事務局 白澤 聖樹

「第9回大学人サミット信州・まつもとカレッジ2015」は、全国の大学人がともに語り合い、充実した2日間となりました。

1日目は、「松本大学開学からの13年」と題した住吉廣行学長の基調講演で幕を開け、続く「オープニング・トレーニング」で、参加者がグループに分かれて、一人ひとり約3分間、「輝いている私」をテーマに発表し、それに対して褒め合うことで和やか

な雰囲気生まれ、一気に参加者同士の距離が縮まりました。

次に実施された「ワークショップ」では、「地域に愛される大学とは？」をテーマに掲げ、6つのキーワードをもとにディスカッションを行いました。今取り組んでいる施策や、新たに実施してみたい施策などに対して多様な意見が飛び交い、活気に満ちた時間となりました。

また「情報交歓会」では、本学学生による「健康づくり体験」や「お料理のプレゼン」を行い、本学の魅力と「味」を存分にアピールしました。さらに、ユニークな思考を凝らした「手づくり名刺コンテスト」や翌日の「大学自慢コンテスト」の発表順抽選を行

い、大いに盛り上がりました。

2日目の「大学自慢コンテスト」には、本学を含む9大学がエントリー。自分たちの大学を様々な視点から、自由なテーマとユニークな発想で自慢しました。9分間の限られた発表時間の中、各大学の取り組みや特色が垣間見えました。

今回の大学人サミットは、若手職員を主体に企画と運営を行ってきました。この2日間を通して、日常の業務では得られない多くのことを学ぶことができ、まさに松本大学の「結束」と「魂」を感じた時間になりました。ここで得たことを今後役に立て、大学にそして学生に還元していきたいと思えます。開催にあたり、お力添えいただいた皆さんに心より感謝申し上げます。ありがとうございました。



「デパートサミット」の高校生も参加しました

本学の高大連携教育活動のひとつである「デパートサミット」が、「大学人サミット」に参加しました。当日は高校生の合同販売



店舗である「デパートゆにっと」が会場内に売り場を設け、県内4校の高校生11名が本学の学生とともに、自ら開発した商品を紹介しながら意欲的に販売を行いました。本学からは観光ホスピタリティ学科白戸ゼミが開発した「山賊焼まぶし丼」を出品しましたが、各校の商品は参加者に好評を博し大部分が完売となりました。

また展示コーナーでは、「デパートサミッ

観光ホスピタリティ学科 教授 大野 整

ト支援会」の学生によるパネル展示や長野商業高校の生徒によるプレゼンテーションも行われました。高校生と連携した本学での学習会「マーケティング塾」の様子や地域の食材を生かした商品開発の過程などが紹介され、「デパートサミット」の活動を全国の参加者に向けて発信することができました。また参加者にとっても本学の特色ある教育活動の一端に触れる良い機会となりました。

大学自慢コンテスト集計結果

◆総合順位(表彰大学)

- 1位 田園調布学園大学
- 2位 共愛学園前橋国際大学
- 3位 松本大学

◆評価部門別1位

- 1 学生・キャンパスをイメージできた…東日本国際大学
- 2 愛校心が伝わりました…共愛学園前橋国際大学
- 3 仕事や自分の生活に活かしたいヒントをもらいました…弘前大学
- 4 この大学で働いてみたい・学びたいと思いました…松本大学
- 5 大学自慢に感動しました…田園調布学園大学

◆手づくり名刺コンテスト

- 1位 小口 洋司(松本大学)



他大学の参加者からのメッセージ

“学生の成長”が何より嬉しかったサミットでした!

長岡大学
教務学生課 資格取得支援センター主任
山田 健央

この度のサミットは、実に学びの多い、有意義なイベントでありました。

特筆すべき成果は、学生のプレゼンテーション力の向上です。元々期待値の高い学生達ですが、大学自慢コンテストの練習を重ねる中で、スライドや発表姿勢に大きな成長が見られ、本番では実に堂々たる姿を見せてくれました。

職員にとっては、学生目線に立ち返る、大変貴重な機会になりました。各セッションで他大学の学生の皆さんとも交流する機会があり、日々の仕事に埋没してしまいうるなところに、良いスパイスとして効いていると実感しています。

最後に、松本大学の皆さまをはじめ、当企画に携わった方々に心から感謝を申し上げます。本当にありがとうございました!

地域と共に成長できる大学創り

名古屋女子大学・名古屋女子大学短期大学部
学生支援センター 教学支援部門

不破 克憲

大学人サミット当日の朝、北新・松本大学前駅で電車から降りると、笑顔あふれるスタッフの皆様が出迎えてくださいました。生き活きとした表情で学生教職員の壁を感じさせない、皆様が一丸となって創られているサミットであると実感致しました。

サミットを通して、学生教職員が地域の人を呼び、人と人がつながり、新しいアイデア・企画が生まれる。それが、地域活性化につながると感じました。同時に、学生が経験を積み、地域を愛し、地域の将来を担う人間となることが、地域と共に成長を目指す大学の姿ではないかと思いました。今後も大学人同士の交流を通して、お互いに切磋琢磨し、地域を愛し、愛される大学創りを展開していきたいと思っております。

痛感! 学生さんは職員の鏡!

岩手県立大学
キャリアセンター(就職支援グループ) 主事
川崎 紋

サミット参加にあたっての楽しみのひとつが、松本大学の学生さんにお会いすることでした。かねてよりマツナビの活躍を耳にしていたので、冒頭のキャンパスツアーから前のめりになり、その後のワークショップでは積極的な姿勢や新鮮なアイデアに感心させられました。

さらに懇親会での愛の詰まったお料理、食前に教えていただいた肩回し体操…数々のおもてなしが思い出されるのですが、何よりも、爽やかな挨拶や笑顔が一番心に残っています。

「子は親の鏡」といいますが、学生さんの姿を見て、日ごろの教職員の皆さまの教育活動に感服しましたと同時に、学生第一でありたいと襟を正すきっかけをいただいた貴重な2日間でした。

教育学部・学校教育学科 (定員80名) 設置に向けて

教育学部設置準備室長 川島 一夫
松本大学 学長 住吉 廣行

松本大学では2017年4月に教育学部の開設を予定しています。長野県短期大学の4年制化に端を発し、県内私学が次々と公立化を標榜する中、本学の将来を考えての計画です。教育系を志望する学生が、首都圏、中京圏へ出ざるを得ない状況を緩和し、県内私学との重複を避けた魅力有る学部創設で、県内残留率を少しでも高め、地方創生の一端を担おうと考えています。

松本大学が計画し、文部科学省に認可申請しようとする、教育学部・学校教育学科の概要を、①教育内容、②養成する教師像、③研究面、に見られる特長を中心に紹介します。

① 教育内容

【基本的学修】 小学校教諭1種免許

【選択的学修】

- ①特別支援学校教諭1種免許
- ②既設学部での中学校1種免許(社会・保健体育)
- ③将来の公認心理師受験資格を見通した心理学関連科目の充実でスクールカウンセラーをも目指したい

【基礎的特徴】

充実した教職及び教科科目とその担当教員を配置し、質の高い教育を実施します。

- 子どもを理解し、子どもの学ぶ意欲を引き出す授業を展開出来る教員を育成します。

松本大学の特色である地域連携・地域貢献を教育学部でも展開します。

- 地域連携を追求する科目の充実で、信州型コミュニティスクールの活性化を目指します。

学校インターンシップ推進センターを設置します。

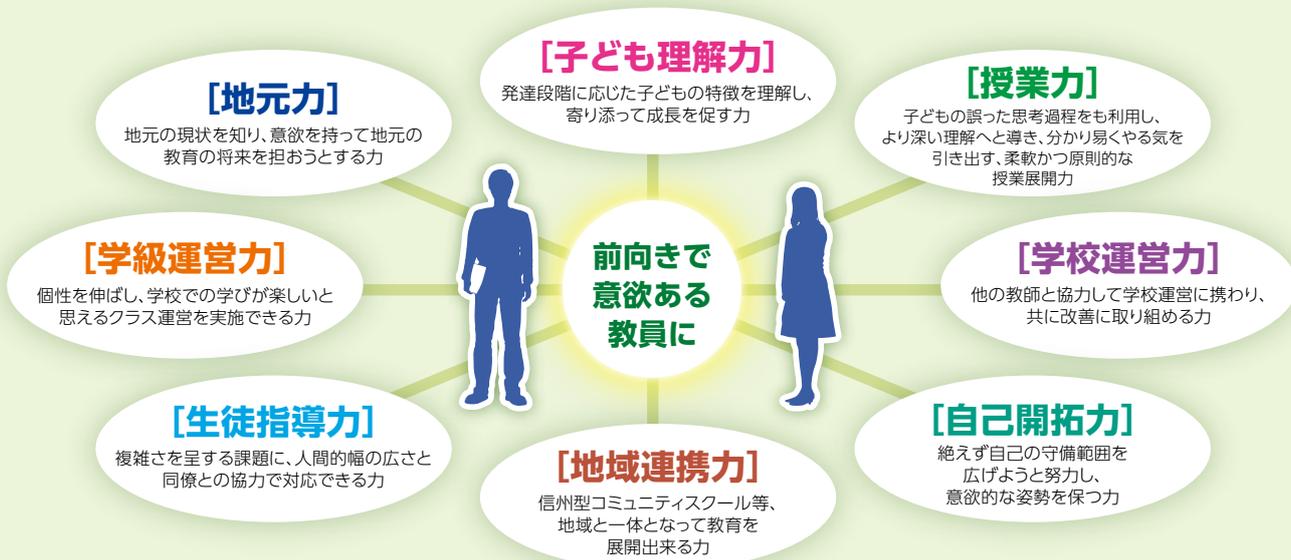
- 教育委員会や学校の協力を得て、1年次後半から現場に入り子ども達や先生方との交流を深めます。

教育実習支援センター、教員採用試験対策支援センターを設置します。

- 教育実習や教員採用試験への準備も全面的にバックアップし、日頃の学修成果にも自信を持って教師を目指す学生を育成します。

② 養成する教師像 -8つの力-

複雑な様相を呈する初等教育にあって、教員に求められる力は多岐にわたっています。本学では、次のような力を身に付けた教員の養成をめざしています。



③ 研究面でのセンター機能の充実 -現場との協働を重視-

教員が各々の専門的研究を継続することに加えて、次のセンターを学部内に設置して、具体的教育課題について現場と共同で研究します。

- ▶ **教育相談・共同研究推進センター**…… 教育現場において苦悩する課題を気軽に相談でき、その課題解決に向けた大学教員との共同研究等、学校現場と大学との協働を推進する窓口となります。
- ▶ **社会進出支援センター**…… 障がいを持った方々が社会に進出し、将来の生活に展望が持てるシステムづくりに、他分野の方々と協力して取り組むための窓口を設けます。

今後の「教育学部の設置認可」「教職の課程認可」の申請過程において、変更が伴う場合もありますが、本学の考え方はおおよ上記の通りです。

地域の中での教員養成 これからも

～本学教職センターの取り組み～

教職センター長 川島 一夫

松本大学の教職課程では、大学のモットーである「地域の学びを通して、社会の最前線で活躍する人になる」ことを実践するために、教員という職業をめざす学生のための教育を行ってきました。学科によって専門となる履修科目は異なりますが、共通しているのは、「地域社会と密接に協力連携し、地域社会の人々との協働能力を身につけた教員を養成すること」。「地域の中での教員養成」を基本方針としているのが特色です。

その具体的な実践として「地域教育活動」「学校支援ボランティア活動」「地域学校教育活動」という科目を設け、教職課程履修者の必修とし、主体性、積極性、人間関係の構築、社会常識や意識を、在学中から段階的に高めることを目標としています。

本年度から始まった「教員免許状更新講習」が無事終わりました

松本大学では本年度から、本学の教員が講師を務める「教員免許状更新講習」を始めました。教員免許の更新は、教員に必要とされる資質能力が保持されるよう、また最新の知識技能を身につけるために行うもので、すでに全ての講習が終わり、延べ449名の先生方の単位が認定されました。



講習の内容は多岐にわたり、「体質に関わる遺伝子型解析実験」、「身体組成(筋肉・骨)を知る」、「マーケティング実践講座」、「経済のグローバル化と日本社会の変容」、「地球環境とエネルギー問題」、「生命倫理学入門」、「ミクロの世界をのぞくー細胞を見る」、「栄養教育・給食管理・栄養調査に活かす食事摂取基準と食品成分表」、「現代社会とスポーツ」、「小学生用の環境を使ったプログラミング入門」、「美味しさの調理学」、「結婚と結婚式 その変遷と現状」、「こどものこころとからだの健康」、「国際観光とホスピタリティ」、「良好な人間関係を築くために～コミュニケーションのズレに気づく～」、「ベースボール型の授業づくり」、「社会福祉を取り巻く動向」、「中学校用インターラクティブ、英語学習ー理論と実践」でした。どの講習もとても高い



評価を得ています。

校友会(卒業生をサポートする会)を開催しています

松本大学では、教育関係機関に勤務する本学卒業生へのサポート組織として「校友会(しゅうかい)」を、定期開催しています。学校での不安を少しでも解消し、前向きに教員生活が続けられるように、情報交換及び会員相互の親睦の場として毎年2回程度行っており、30人程度の参加者がいます。今年度は4月25日に開催し、さらに1月30日にも、これから教職を目指す学生や卒業生のための会を開催する予定です。



長野県高校教員に現役合格しました ～平成27年度教員採用試験の結果～

平成27年度は、松本大学教職センター設置以来はじめて、教員採用試験の第1次試験に5名の現役生が合格、さらに1名は2次試験も合格、2名が補欠となりました。長野県高等学校教諭(商業)の採用試験に現役で合格した林大輔さん(総合経営学科4年)をご紹介します。



総合経営学科4年 林 大輔
(長野県穂高商業高校出身)

商業科の教員になることは、高校生の頃からの目標でした。私が採用試験の勉強を本格的に始めたのは、3年生の10月からです。毎週木曜日に教職学習室で、友人らと学習会を開き、教職センターの先生に指導して頂きながら勉強を進めました。就職活動との兼ね合いもあり、3、4月は大変忙しい中、勉強を継続して行いました。5月末には教育実習が始まるため、5月の初めには就職活動は終了をして教員採用試験一本に絞りました。この頃から専門教科の勉強に集中し、

毎日6～8時間は勉強していました。7月の一次試験前には、教職センターの先生方に集団面接の練習を行って頂きました。試験の様子を再現しての練習が出来たため、本番も緊張することなく試験に臨めました。結果として、一次試験に合格することが出来ました。専門教科は120点満点中、105点を取ることが出来たので、これが合格の要因のひとつだと思います。

二次試験にあたっては、教職センターや基礎教育センターの先生方による面接対策を行って頂きました。また、面接カードや模擬授業のご指導をして頂きました。今回、現役での合格に至ったのは教職センターの先生方のご指導のおかげだと思います。4月から、長野県の商業教育に貢献することで、恩返しをしたいと思っています。

長野市中条地域最大「むしくらまつり」の連携・協力

総合経営学科 教授 清水 聡子

11月3日に、学生20名(総合経営学部19名、人間健康学部1名)と教員4名(住吉廣行学長、室谷心総合経営学部長、小林俊一総合経営学科教授、清水)の計24名で、長野市中条地域最大のイベントである「むしくらまつり」に参加しました。



学生の参加は、本学と道の駅「中条」及び長野国道事務所による長野県初の連携企画型実習の一環です。総合経営学部では国土交通省が推進する「道の駅を利用した地域活性化」に積極的に参加し、①「子育ての神：山姥(やまんば)伝説の里」中条のお宝探し②中条地域最大「むしくらまつり」の連携・協力を行っています。

今回のむしくらまつりでは5つの企画が実現しました。

1. やまんばの里キーホルダー…子育ての神様・やまんばにちなんで家族をテーマにしたキーホルダーを作りました。デザインを学生が手がけ、やまんばの子どもである金太郎と、その父の竜を取り入れました。

2. 西山大豆おからドッグ…西山大豆の力を引き出すために、試作を重ねた惣菜パンです。ひじき入りはソフトな舌触りと健康志向の方へ、ひじき無しは鶏のひき肉多めでボリュームのあるお昼を望む方へ、異なるターゲットを意識して開発しました。

3. 88プロジェクトスタッフジャンパー…やまんばの「や」と「ば」を数字の8で表現したら面白い!学生の柔らかい発想から生まれた「88プロジェクト」。中条地域がより元気になるようにという学生の思いが形になったジャンパーです。

4. 88プロジェクトDance Show Time in 道の駅中条(ダンスイベント企画)…学生が考案したダンスイベントで、Kidsダンサー9名が本格的なダンスを披露しまし

た。来場者も踊り、会場が一体となりました。

5. きのご千人鍋の調理・ふるまい…きのご千人鍋の作り方を教えていただきながら調理し、無料で来場者の皆様にふるまいました。千人鍋でしたが、あつという間に鍋は空になりました。



おまつりは地域のアイデンティティ(存在証明)であると考えられます。学生は「むしくらまつり」において、自分に何ができるかを問いかけ、惜しみなく力を注ぎました。学生の思いに寄り添い、一緒に向き合ってください道の駅「中条」の皆様、中条地域の皆様、そしてご来場者の皆様、本当にありがとうございました。88プロジェクトは、中条地域の皆様と地域自慢の種を一緒に育てていきたいと考えています。中条へ「さあさ よつとくらえ」。今後の取り組みにご期待ください。

フード・アクション・ニッポンアワード2015 「信州アルクマそば」が入賞果たす

健康栄養学科 専任講師 矢内 和博

この度、国産農林水産物の消費拡大に寄与する優れた取り組みを表彰するフード・アクション・ニッポンアワード2015に「信州アルクマそば」が入賞しました。松本大学、有限会社あづみ野食品、JR東日本長野支社事業部、行政が連携して開発し、発売から2年が経った商品です。

当初、3万食で原料がショートするから販売休止だという話をしながら、県庁での記者会見に臨みましたが、テレビの力は絶大で、翌日、長野駅では30分で完売、量産の要望が毎日のように来ていました。アルクマそばの販売数は約35万個、当方で開発した、その原料となる「焙煎そば粉EX」の生産量は10トンを超え、現在は安定期に入り、一定数の販売で推移しています。よって、信州産玄蕎麦の確保から、栽培面積増大と1次産業を活性化させる、つまり、生産

者にやる気と希望を持たせたこの商品化は、産学官連携、また農商工連携というどちらのカテゴリーにも一致する商品スキームで、6次産業推進という国の構想に、大きな提言をしたと思っています。

そしてこの度、大学の立ち位置、つまり大学がどのような役割を果たすべきかという点をモデル化し「松本大学地域活性化モデル」6次産業化バージョンを構築しました。構図としては、大学を中心に1次、2次、3次産業と三角形の関係を作り、各産業は横のつながりを持ちます。行政は、大学と各産業をつなぐ橋渡し役として存在し、情報提供を常に行うという構造です。おそらく従来の大学の関わり方である、大学がある部分にのみ関わり、研究費をもらって成果を出して終わりということではなく、大学がすべてに関わるという仕組みです。大学



がコーディネーター役として関与するということです。やはり、一緒に汗をかき、討論し、一緒に作り上げる努力を関係者全員で行い、苦勞を共有することが成功のカギだと思えました。そして、みんなで苦勞して、みんなで少しずつ利益を得る形が、長く事業を続けるうえで大事だと感じました。

大学における地域研究はスマートであってはならないと個人的に思っています。地域活動を通じた研究で、学生に学ぶ機会を与えていただいているので、こちらも大学ができることを全力でやるべきだと思っています。このアワードが、地域の方々の励みになり、また松本から発信する地域活性化のモデルになればと思っています。

ネパールでボランティア活動を実施

観光ホスピタリティ学科 教授 尻無浜 博幸

今年の9月中旬、ネパールの首都カトマンドウを学生5名と目指しました。4月25日に発生した大地震の支援活動を行うためです。参加した学生は、松本大学と信州大学の合同チームです。

東日本大震災の支援活動も5年目に入り、ちょうど6月に、その学習支援活動を終えて石巻市から帰る途次、ある学生が「ネパールの支援はどうなるんでしょう?」と問うたのをきっかけに準備した活動でした。本学には東日本大震災での支援活動経験者が多くいるため、それはごく自然に被災地のことを想像しての発案だったと受け止めています。最初の参加者は8名でしたが、バンコクの爆発事件等も影響して最終的には5名となりました。

今回の震源地は、エベレスト山系のシンドウパルチョークという地域であり、首都から

車で3時間半の山間の村です。まずこの村を視察したところほぼ壊滅状態で、素人の我々が手を出せる状況ではありませんでした。この村に滞在して支援活動を行う計画で日本からテントなどを持参していましたが、その日のうちに下山を余儀なくされたのです。

そして一旦、首都に戻り計画を練り直しました。被災者と直接向かい合う支援を心がけ、首都近郊で一番被害がひどかった、ブングマティという村に遇いました。7世紀のお寺が残る古い古い村で、ネパール民族の故郷的な地域です。家族総出で崩壊した家の2階の片付けをしているところがあり手伝いました。屋根のトタンの設置まで作業が進み、翌日には隣の家から要請があり、2班に分かれて作業するなど支援活動が一日一日と広がっていきました。



国家レベルの支援活動は展開されていても、一般民衆の家の片付けまでは行き届いておらず、日本のようなボランティア活動の仕組みも活発でないため、被災者は国家レベルの支援の順番をただ待っている状況にありました。このような状況を学生はしっかり把握してきたので、また次の活動に向けての目標ができたことでしょうか。

地域課題に向き合う学生と住民

～けやきプロジェクトの取り組み～

観光ホスピタリティ学科 教授 白戸 洋

総合経営学部の学生は、松本市渚の地元住民による「保存樹を考える会」と連携し、2014年度から「けやきプロジェクト」に取り組んできました。もともと駅の西側は、

田川や薄川が流れ、巾上や渚など水に因んだ地名が残るように水が豊富な地域です。渚にある松林家の敷地内にある樹齢600

年を越える18本の榎も、湿地を宅地へと改良する役割を果たしている貴重な地域の財産ですが、住民の悩みの種でもあります。かつては広い敷地にあった榎の木々も近隣に住宅が増えるにしたがい、1日で50cmも積もる落葉によって住宅の屋根や樋に被害が生じ、地域は伐採すべきと保存すべきという声の狭間に揺れています。



プロジェクトは、1年目は落葉拾いとその落葉を使った焼きいも大会を田川小学校で行ない、さらに落葉による堆肥づくりや、健康栄養学科の矢内ゼミとともに榎をモチーフにしたケーキの開発・販売をしました。2年目の今年も活動を継続し、新たに小学生の環境学習として榎の見学を行い、地域住民を巻き込みながら地域の宝として榎をどう守るかに取り組んでいます。また白戸ゼミでは「屋敷林の保存と地域づくり」というテーマで学術面からの研究もしています。

今後は、落葉を使った商品開発、屋敷林保全の学習会や視察などを予定しています。地域の住民だけでは解決が難しい課題に学生が参画することで、地域がつながり活動が活性化するモデルとしても大切に取り組んでいきたいと思えます。

ASEAN5カ国の大学生と交流深める

観光ホスピタリティ学科 教授 益山 代利子

11月15日に、東南アジア諸国連合(ASEAN)5カ国(インドネシア・シンガポール・フィリピン・ブルネイ・マレーシア)から、観光を学ぶ大学生20名が松本大学を訪問しました。この交流会は日本アセアンセンターの若者の交流促進事業で、毎年東南アジアの学生を日本に招き、学生間の国際交流イベントとして行っているものです。

長野県白馬村での宿泊体験を終えた大

学生たちは、本学では、観光を学ぶ学生や留学経験のある学生らと共に茶道体験をした後、各国の文化事情について英語でディスカッションを行いました。各国の観光資源、サブカルチャー、ファッション、結婚事情、学生生活等、5グループに分かれて其々のテーマについて比較を行いました。また、長野県を深く知ってもら

うために、長野県ならではの観光地や食の特徴について、事前に準備しておいた資料もとに紹介するグループもありました。言葉につまる場面でも、即興の伝統舞踊や歌の披露、折り紙など、様々なコミュニケーション技法を駆使して、交流を深めました。





文部科学省

地(知)の拠点

大学COC事業

平成25年度文部科学省「地(知)の拠点整備事業」(大学COC事業)の選定を受けての最近の取り組みを紹介します。

出張実験教室を開催して

大学院健康科学研究科長・教授 山田 一哉

大学COC事業の一環として、11月13日に高木勝広教授・浅野公介助手・羽石歩美助手とともに松本美須ヶ丘高等学校にて出張実験教室を開催しました。実験教室は、受講者の唾液からDNAを単離・精製し、遺伝子の一塩基多型を決定することにより、①お酒に強いかわいいか、②太りやすいかどうか、③短距離走型筋肉か長距離走型筋肉かという体質を調べる内容です。「物質」としての遺伝子と「情報」としての遺伝子を理解することを目的としたものです。

私達はこの8年間、日本学術振興会や科学技術振興機構の補助を得て、「ひらめき☆ときめきサイエンス」や「サイエンスパートナーシップ事業」として、本学で実験教室を開催してきました。各回の実験終了

後に受講者に向けて行うアンケート調査の自由記入部分に、受講生や引率の高等学校の先生からの意見として、「こういう実験教室を高等学校でやってもらえればうれしい」「自校生にたくさん受けさせてやりたいが休日開催の上、引率中に事故があると困る」「高校には同様の実験を行うための器具もノウハウもない」などの意見が複数寄せられていました。また、ティーチングアシスタントとして実験指導に当たった本学の学生からも「こんなに楽しい実験をもっと多くの高校生に受けてもらいたい」「人に物事を教えることの難しさと楽しさを知ることができるいい機会になった」という意見も多数ありました。

そこで、今回初めて大学から飛び出して、高等学校へ出向いて実験教室を開催することにしました。対象は、生物を選択している2年生のうち希望者20名でした。実際にはもっと希望者が多かったのですが、20名に絞ってもらいました。

あらかじめ、高校生から採取してもらっ



た唾液を大学に持ち帰り、そこからDNAを抽出し、遺伝子型を決定するPCR反応を行いました。当日、その反応産物を高校に持って行き、アガロースゲル電気泳動を行って各自の遺伝子型を判定してもらいました。高校生は、最新の実験器具や機器を間近に見て目をキラキラさせていましたし、手際よく実験操作をしていました。また、自分の遺伝子型を判定したあと、友達と情報交換して盛り上がっていました。大学で行う以上に高校生の反応が良かったので、知り合いが多い中での実験はやはり違うのかなという印象を私達は持ちました。お手伝いのゼミ生も母校で後輩に指導できて感慨深かったそうです。

限られた時間の中で行う実験教室であり、また今回初めての学外会場ということで暗中模索のところもありましたが、無事に開催することができました。参加してくれた松本美須ヶ丘高等学校の高校生、小林万喜子理科教諭をはじめ、ご協力いただいたすべての方にこの場を借りて感謝いたします。



シニア世代が楽しく元気に学びました! 本学で「まつもとシニアカレッジ」開催

管理課長 赤羽 雄次

「健康寿命を延ばそう!」をキーワードに、シニア世代の皆さんが健康でいきいきとした生活を続けるヒントやコツを学ぶ「第3回まつもとシニアカレッジ」(長野朝日放送・市民タイムス・松本大学共催)を、10月31日、11月1日の2日間、本学を会場に開催しました。今年はさまざまな分野の13講座を延べ520名が受講し、シニア世代の「健康」に対する関心の高さを感じるものとなりました。

本学からは、「色を楽しむ」「宇宙を目指

して、健康を知る」「感動する旅のつくりかた」など教員の専門分野に関係した5講座を開講。受講生は熱心に聞き入り、大変満足した様子でした。また講座を担当した教員も、受講生の態度や姿勢にとても学習意欲が高いと感じたようです。ほかにも管理栄養士や理学療法士などの専門職から健康づくりを学ぶ講座や、「お葬式勉強会」「みんなの安全ドライブテクニク」と



いった生活に身近な内容の講座も用意されました。

シニア世代が、地域で活躍する企業・団体から充実した生活を過ごすためのヒントを学び、広く役立てていただくためにも、定着させていきたいイベントです。

～ 助けられる人から助ける人へ～ 「防災士」に本学学生23名認定

防災対策委員会委員長 矢崎 久

9月19、20日の両日、本学を会場に防災士養成講座を開講しました。この資格は阪神淡路大震災を教訓として設立された日本防災士機構が認定するもので、今年の本学の学生23名、行政職員、会社員などの社会人51名の計74名が受講しました。



防災士は、火災はもとより地震、噴火、水害など突然に降りかかる自然災害への備えとして「自分の命は自分で守る」「地域は地域の人たちで守る」「職場は職場の人たちで守る」という、自助、共助、協働による防災や減災の担い手としての役割が期待

されており、近年は市町村内における発災時の対応力向上をはかることを目的として、役場職員に対して資格取得を推奨するところまでできております。

防災士を取得す

るためには、「土砂災害と対策」「地震の仕組みと被害」「災害想定とハザードマップ」といった指定された12講座の受講、研修レポートの提出、さらに救命救急講習の修了、加えて同機構から派遣される試験官の監督下でおこなわれる認定試験に合格する必要があります。社会人とともに学んだ本学の学生からは「地域防災の担い手としての自覚が芽生えた」「社会人と協働した図上訓練からは、被災状況の把握と判断、それを踏まえた対処の難しさを学んだ」などの声が聞かれました。

本学では、今年度の地域課題研究として「地域防災」を掲げ、地域社会における防災や減災の取り組みの一環として自主防災組織の準備設立を目指しており、本学の防災士資格取得者は、この担い手としても期待されております。

今年は秋色 「一日限りのレストラン」

健康栄養学科 専任講師 成瀬 祐子

健康栄養学科の学生が企画・運営する「一日限りのレストラン」を、10月4日に開催しました。9回目を迎えた今年は、1～4年生58名と多くの学生が参加し、春より活動を進めてきました。

毎年のごとくではありますが、学生たちは、お客様にとって魅力的なテーマ、そして自分たちが伝えたいことをレストランで表現する方法を決定するのにとても苦慮してい



ました。そして、時間をかけて決めた今年のテーマは「秋」。秋を料理で表現することにしました。

サンマやリンゴ、洋ナシといった秋の食材を使用するだけでなく、黄金色の田んぼをイメージした黄金色のスープ、秋色に盛り付けた主菜など、様々な形で秋を表現することができました。また、フロアの飾り付けも紅葉をイメージし、来てくださったお客様に楽しんでいただくよう工夫を凝らしました。

私たち教員にとっては、学生たちが何度も議論と試作を重ねながらよりよい料理を作り上げていく過程を体験する中で、学生



それぞれが力を付けていくことを感じられる半年でした。これもひとえにこのレストランを応援して下さる地域の方々への支えがあってこそと感謝するとともに、学生たちが今年身に付けた力をベースに、来年はどんなレストランを誕生させてくれるのか楽しみにしています。

地域力創出のためのノウハウ学ぶ 今年も「地域産品デザイン講座」開講

観光ホスピタリティ学科 教授 山根 宏文

「消費者の心をとらえる」そして「商品力を高める」ことを学ぶ、地域力創出のための「地域産品デザイン講座」を、大学COC事業の一環で今年度も開催しました。

昨年度はマーケティングを中心に講義しましたが、今年度は、商品パッケージをデザイナーに的確に依頼出来る、あるいは、ある程度自身でデザイン出来るようになるために、デザイン力を養うことを重点的に学べる内容にしました。講師に

は経験豊富なデザイナー、大手地域産品ネット販売勤務経験者、食品会社の実践者、都市デザイナーを招き、①地域産品をデザインするために大切なこと ②想いを伝え魅力が伝わる商品デザインとストーリー創出 ③商品デザインとマーケティング ④商品ストーリーが顧客に届くデザイン ⑤地域産品デザイン実践のためのワークショップ ⑥地域産品デザイン発表会など、専門的かつ興味深い講義をしていただきました。

約40名の参加者は商品開発実践中の関係者が多く、毎回とても真剣で熱気のある講座となりました。



栄養面から健康を考える特別講演会を開催

大学院健康科学研究科長・教授 山田 一哉

大学COC事業の一環として、2つの公開特別講演会を開催しました。内容の概要を紹介します。

食欲増進ホルモンの役割を知る

10月9日に特別講演会「どうしてお腹は空くのか？食欲増進ホルモン“グレリン”の役割」を開催しました。講師は、グレリンの発見者である久留米大学分子生命科学研究所の児島将康教授にお願いしました。本学の1年生を中心に、2年生、4年生、大学院生、教員、一般の方々も含めて約140名の参加がありました。

講演では、グレリン発見の過程について、①誰もが考える脳からではなく、胃から精製をしたこと、②精製物とアミノ酸から合成したペプチドの分子量の差から、脂肪酸に修飾されて活性を持つ分子である点を突き止めたこと、を当時のノートのコピーやメモまで見せて紹介していただきました。また、グレリンの生理作用が、成長ホルモン分泌促進以外に食欲刺激・摂食亢進作用があることが明らかになった経緯についてもお話いただきました。最後に、グレリンの血中濃度の日内変化やグレリン欠損マウスでは絶食時の体温低下が見られないことなどから、グレリンは摂食量を増やすと同時に消費を抑えて体内にエネルギーを蓄積させるホルモンであると結論づけられました。

聴講した学生達が生まれた頃には、人類はまだグレリンに出会っていませんでした。しかし、新しい物質が発見され、その作用が明らかにされることで、次々に多くの研究分野を刺激することを理解できたと思います。

また講演全体を通して、「研究は失敗が多くしんどいけれども、何物にも代え難いほどおもしろいものである」というメッセージをいただきました。ノーベル医学生理学賞を日本人が受賞したタイムリーな時期に特別講演会を開催できました。今後、一人でも多くの学生が研究の世界を目指すきっかけになってくれたらと切に願います。



栄養学的に骨粗鬆症の予防を学ぶ

11月20日には、京都光華女子大学健康科学部健康栄養学科の廣田孝子教授をお招きし「3世代にわたる骨粗鬆症の予防法」を開催しました。健康栄養学科の1・3年生を中心に、学部生、大学院生、一般の方ならびに教員も含めて約210名が聴講しました。

廣田先生は、研究者として多くの論文・著書を刊行されるほか、「世界一受けたい授業」「ミラクルレシピ」「ちんぷいぷい」など数多くのTV番組や新聞等で栄養について科学的にコメントしておられます。

講演では、おもに女性のライフステージでの骨粗鬆症予防法について話されました。はじめに、骨粗鬆症のお年寄りの女性では、脊椎骨に骨折が起こって背中が曲がってしまうこと、大腿骨に骨折がおけると寝たきりになり要介護状態に陥ってしまうことをお話いただきました。骨粗

鬆症の発症は女性ホルモンの分泌低下と密接な関連があります。医学的には、薬剤投与や女性ホルモンの補充療法等もありますが、栄養学的にも関与できる領域があること、すなわち、栄養士が専門性を発揮して関与できる領域があることを力説されました。

さらに女性ホルモンが分泌され始める思春期、分泌が維持される青年期、分泌が止まる更年期・老年期に分けてご説明いただきました。思春期に蓄積した骨密度を100%として、70%以下に低下したときに骨粗鬆症と診断されます。閉経後には、どうしても骨密度は減少していくため、基本的には思春期に骨密度を増加させるかが重要だとのこと。しかし、それ以外のステージでも適切に食事をとり運動すれば骨密度の低下が防げると伺いました。骨粗鬆症を予防するには、1日あたりカルシウムを800mgとる必要があること、カルシウムの吸収効率を上昇させるビタミンDやビタミンKを含む食品をとる必要があること、さらにそのための食事メニューとして、牛乳を含めた乳製品や魚が大きな役割を果たすこともお話しいただきました。廣田先生は、研究者・教育者・臨床者・啓蒙者など様々な面を持っておられるので、今回の講演で学生が自分の目指す管理栄養士像のひとつとして具現化できたのではないかと期待します。



大正ロマンの味、おやきになる!!

観光ホスピタリティ学科白戸ゼミでは、松本市上土商店街とともに「大正ロマンの



街づくり」に取り組んでいます。明治期に日本に入ってきた西洋の食文化が庶民に定着した大正時代は、現代の生活スタイルの原型ともいえます。ゼミでは、昨年度開発した大正時代のレシピで作ったカレーをおやきの具にした商品として、上土商店街とおやき工房旬菜花と連携して大正ロマンカレーおやきを開発しました。ジャガイモと鰹節を使用する大正ロマンカレー

は水分が多くおやきにすると皮から染み出してしまう難点があり、それを補うためにマッシュポテトを使用するなど、工夫を凝らしました。11月10日に本学で商品発表会を開き、マスコミの注目を集める中で四柱神社のえびす講で販売したところ、用意した商品があっという間に完売しました。今後はお土産品としても販売に力を入れていく予定です。

(観光ホスピタリティ学科 教授 白戸 洋)

平成27年度 文部科学省「私立大学等改革総合支援事業」 今年度は5つの取り組みが採択



平成26年度採択 保育園給食の放射性物質調査のための測定装置

文部科学省では、教育の質的転換(タイプ1)、地域発展(タイプ2)、産業界・他大学等との連携(タイプ3)、グローバル化(タイプ4)などの改革に取り組む私立大学等を支援するため、「私立大学等改革総合支援事業」を実施しており、今年度も松本大学と松商短期大学部それぞれタイプ1、タイプ2に採択されました。これに加えて、事業を推進するために必要な設備費や整備費が補助される5つの取り組みが採択されました。

私立大学等教育研究施設整備費補助

ICT活用 推進事業

本学においては、全学的にカリキュラム・マップやナビリングにより、学生に対して学修のためのロードマップを示しています。さらに、ディプロマ・ポリシーとの関係性や授業外学修について明示したシラバスを全学挙げて構築してきました。これらの活動を踏まえた次のステップとして、学生の学修到達度とその成果を重視する教育の推進を標榜し、全学的な教学マネジメントの下に、学内のICTを活用した教育環境を強化することにより、授業を中心とする教育の質的転換を推進しつつ、さらにオフィスアワーを有効に活用しながら、授業と授業外の指導の有機的な結合を促進していきます。

具体的には、教室内に配置しているプロジェクタや映像制御装置等の機器およびPCの接続方式を現況のアナログタイプからデジタルタイプに変更し、ICT環境の高度化を進めます。さらにWebへのアクセス・ポイントを増設することで無線LAN環境を強化します。

私立大学等教育研究活性化設備整備事業

大学 タイプ1 教育の質的転換

学生の主体的な学びを促進するために、携帯端末等を利用したアクティブラーニングを導入し、さらに授業外で意欲的かつ能動的に学修に取り組める教育環境をICTの活用により構築します。また、学生の学修行動や成果を可視化し、教授方法の工夫・開発がしやすいように環境を整備します。具体的には次の3点を実施します。

- 1 携帯端末や貸与するタブレット端末を授業外で利用できる環境整備として、学生認証機能を持った無線プリンターを学内に配置します。
- 2 授業評価アンケートを一新し、結果をWEB化して全学的に共有することでFD活動の充実を図り、授業の振り返りおよび授業改善を強化します。
- 3 学修行動調査を行い、これに学修達成度測定を加え、教学IRの更なる充実および総合的な教育マネジメント体制の構築を図ります。

短大 タイプ1 教育の質的転換

本学における学生の主な学習フィールドとなっている、3つの教室棟(1~3号館)および図書館の基礎的教育環境を整備することにより、以下の3点を基軸とした総合的アクティブラーニングの推進を図ります。

- 1 多様な規模・形態の授業に随時対応できる基礎的教育環境の整備、並びに、旧来の講義形態から双方向の授業形態への転換・拡大を行うために、1号館の90人規模の2教室、3号館の60人規模の1教室にアクティブラーニング対応の机および椅子を整備します。
- 2 アウトプットと情報共有の効率化を図るために、少人数教育に適した60人規模の教室には、学生個々のIT端末と連携可能な大型モニタ(電子黒板)を設置します。
- 3 学生同士の課外活動の支援を目的として、1号館および2号館の学生ラウンジに学生個々のIT端末と連携可能なPCを整備するとともに、図書館のブラウジングコーナーにアクティブラーニングに対応可能な机・椅子等の備品を整備します。

大学 タイプ2 地域発展

本学では平成18年から「松本大学キッズサッカー学校」を週末の昼間に開講し、本学の指導者と多くの学生スタッフが運営に携わってきました。また地域社会全体で「子どものスポーツ教育」を支える仕組みや仕掛けの開発、実現、運営、場の提供などにも積極的に関わってきました。

しかしながら、ますます拡大する地域のニーズに添えていくためには、対象となる子どもたちと、それらの活動の指導・支援を担う学生の活動が可能な平日夜間及び週末の時間帯を延長、拡充していく必要があります。

そのために、本学の総合グラウンドならびに多目的グラウンドの夜間利用を可能にする照明設備を整備し、学生の学びを地域社会に幅広く還元しつつ、同時に正課外教育の更なる充実を図ります。

短大 タイプ2 地域発展

本学は、松本市と「地域づくり」に関する連携協定を締結しており、正課教育と正課外教育を両輪とし、「地域社会と連携した地域課題解決のための教育プログラム」に取り組んでいます。

正課外教育の具体的な取り組みのひとつとして、ライフスタイルの変化により親と子の接点や、地域住民と地域の子どもの触れ合う機会が希薄になっている社会環境の変化に対応するために、本学のCOMMON ROOM(延べ床面積238㎡)を活用して、地域住民や親子で参加できる交流会や、子ども向けのスポーツ、親子遊び、料理教室などを企画していきます。

松本市内の小中学校と本学が連携し、平成27年度から長野県が推進する「信州型コミュニティスクール事業」に係る教育プログラムの本格的な展開を本学学生の活動を絡めながら支援していきます。

COMMON ROOMに、児童の学習支援用のICT機器、教育プログラムに係る資料作成に活用するPC、ミーティング用ホワイトボードなどを整備し、「こども広場」「信州型コミュニティスクールの特別教室」の会場として継続的に活用していきます。

キャンパスを飛び出し
地域を学ぶ!

アウトキャンパス・スタディ

out campus study

》 2つの観光地域の持続可能性を考える

観光ホスピタリティ学科 准教授 中澤 朋代

長野県は北アルプスの玄関口の一つですが、中でも山岳観光地として発展してきた上高地と乗鞍高原は、本学からアクセスの良い市内に位置しています。今年はこれまでのご縁もあり、両観光地に学生と伺いました。総合経営学部2年生に設置する「社会活動」の一環で、複数のチームを

作り、学生主体に地域から学ぶ学習を進めている科目です。

上高地には近年、年間約120万人が訪れています。そのうちガイドツアーに参加する人は1万3千人とその約1割です。さらに山小屋の宿泊者数は1200人位なので、1%の方が装備を付けて山岳部に入ると考

えられています。今回、NPO信州まつもと山岳ガイド協会の協力をいただいて、11月6日に7名の学生と上高地周辺のガイドツアーを検証してきました。学生の目線で自然を解説するガイドツアーの魅力を探り、さらに増加している外国人観光客への対応を聞き取りまし



た。現地の方の地道な努力に、学生の知識が追いついていない程でしたが、若い視点を尊重し、親身にご対応くださったガイドさんに、学ぶことが多くありました。

また10月28日には、5名の松本周辺地域出身の学生と乗鞍高原を訪れました。当初は観光地の活性化について相談する予定でしたが、現地に行くと学校の継続、つまり少子化問題が直面している課題でした。乗鞍高原の各所を地元の方々に案内してもらい、未来へのビジョンを伺って、意見交換をしました。学生からは「とてもきれいな観光地で時々来たくなった」という感想が出た一方で、「自分が住むイメージがわからない」という意見もあり、山岳観光地特有の生活環境に、若者や多様な住人のライフスタイルが必ずしも一致しないことが分かりました。その後は、住みやすい観光地域づくりに向けて、いくつかのアイデアが出されました。「これまで観光振興しか案がなかった」という地元の方の言葉を聞き、相互に学びを得られたと感じたアウトキャンパス・スタディでした。

》 第3回新そばと食の感謝祭に出展

健康栄養学科 専任講師 矢内 和博

今年で3回目となる「信州安曇野新そばと食の感謝祭」が11月14、15日に穂高神社で開催され、矢内研究室の学生が参加しました。主催者の安曇野商工会と6次産業推進事業を進めてきた関係で、私も実行委員として関わってきたイベントです。

安曇野市内のそば店のみ出展するところが、県内のほかのそば祭りとは大きく違うところで、1カ所で市内のそば屋をはしご

できるのが魅力です。しかも、それぞれのそば店のレベルが高く、とても美味しいのです。学生たちは、3年生がそば店や調理師会が出店するうまいものコーナーのお手伝い、4年生が松本大学ブースで物販を行いました。

矢内研究室は、6次産業推進事業を通じて、1次産業従事者、企業、飲食店、行政などとの深いかかわりの中で研究活動をしています。その中で、地域の方々に学生を育てていただき、私たちは研究成果をお返しするという関係で今まで来ました。3期生の代で完成した「安曇野林檎ナポリタン」は今年で発売2年目を迎え、販売店舗も当初5店舗から8店



舗に拡大しました。また、今年は研究室が開発に関わった信州アルクマそば、わさびコロケ、わさび豚まん、わさびおやきも販売しました。これらの商品は、信州アルクマそばを皮切りに発売からちょうど2年となりましたが、売り上げ約1億2000万円を超えました。

研究室がこのイベントに出展する理由は、物販して収益を得ることではなく、安曇野の観光や産業を支える多くの方と触れ合う機会を持ち、コミュニケーションを図ることで、学生が研究しやすい環境をつくるとともに、問題解決型の研究開発活動を行うことにあります。学生の成長の場として、今後もこのイベントを盛り上げていきたいと思っています。



今年の今年も梓乃森祭!

全学学生委員会委員長 尻無浜 博幸

秋の季節を過ごす後期は、行事が目白押しです。今年もキャンパス内に模擬店が押し合うようにして並びました。10月16日の前夜祭を皮切りに17、18日に開催した、第49回梓乃森祭です。学友会(学生組織)の学祭局が中心になって掲げた今年のテーマは、「五臓六腑で騒ぎ出せ」。その意図は、「一人ひとりが梓乃森祭を創り上げていく一部分であり、全身で学祭を楽しんで欲しいという思いを込めた」ということです。



今年は、福澤朗氏トークショーや、野菜スイーツパティシエール柿沢安耶氏の公開講座など、工夫されたイベントも学祭を盛り上げました。

さて、当日の運営はいかがだったでしょうか。短大側敷地の一部が工事のため使用できず、模擬店の配置や機器の受け渡しには大変な苦勞を余儀なくされました。また、模擬店の使用機器改善のため事前保証の担保を昨年に引き続き行いました。

各模擬店出店者から念書を提出してもらい、スムーズな運営が2年がかりで完成した形になったのです。さらに、これまでの夜の警備は教職員が全て担っていましたが、今年から学生が行いました。つまり「全て学生の運営による学祭」が確立したのです。全て学生の申し出に始まり、運用を手配し、問題なく仕組みを納めることができましたことになりま

す。

いつも、学祭局のスタッフが忙しそうに走り回っている姿がちらほら見られましたが、今年はそのような姿を見る機会は少なかったように感じます。入念な準備がされていたためか、それとも気付かなかったのでしょうか。任務上、じっくり学生の準備状況を知るところにあるため、昨年からの続きで判断するならば、昨年からの申し送り事項の確実な遂行があったのではないかと感じます。申し送る側と受け取る側の学生が2年越しの連携で、双方共に責任を



もって取り組んでいる姿を、準備の段階で何度も見る事ができました。

また今年から健康栄養学科の指導で、模擬店等における衛生上の管理徹底を図る取り組みを行いました。さらに精度を上げる取り組みが必要になると思います。

来年の学祭は、第50回目という節目の開催になります。11月5日に、学祭局の反省会があり、「今年の反省は来年にしっかり活かす!」の声があがりました。昨年も今年に活かせたので、今年も来年にきっと活かせると思います。また来年も秋は学祭で楽しみましょう。



学長賞受賞おめでとう! 学生課長 丸山 正樹

第6回(平成27年度)学長賞受賞者・団体

(課外活動) **岩淵 香里** (スポーツ健康学科4年)
スキー競技ジャンプ日本代表ワールドカップ出場

(課外活動) **龍澤 祐末** (スポーツ健康学科4年)
全日本学生陸上競技選手権大会・
全日本学生個人陸上競技選手権大会出場

(課外活動) **ラート競技部**
平成27年度全日本学生ラート競技選手権大会団体優勝

(課外活動) **軟式野球部**
第38回全日本学生軟式野球選手権大会第3位

本学では、学術・芸術・社会・体育・文化活動において他の模範となる成績をおさめ、または社会に貢献した学生、団体を表彰する『学長賞』を設けています。学長賞は受賞者の栄誉を称えるだけでなく、学生の自主的な活動を促し、本学の活性化につながっています。

今年も教職員からの推薦を受けた個人及び団体について厳選なる審査をし、次のとおり決定しました。授賞式は、大学祭「第49回梓乃森祭」の中で行いました。



第6回「松本大学地域貢献大賞」決まる

地域に根ざし、地域で活躍できる人材の育成を旨とする本学では、学生のさまざまな地域活動を多くの方に知っていただくとともに、その活動を支援・推進する目的で「地域貢献大賞」を設けています。今年も大学祭「梓乃森祭」でプレゼンテーションが行われ、大賞をはじめ各賞が決まりました。ここでは入賞した活動について紹介します。

地域貢献大賞 大賞

国際文化振興～5回のフラ(ダンス)イベントによる地域国際文化交流・国際文化理解の実践～

観光ホスピタリティ学科 山根ゼミ

松本大学東日本大震災災害支援プロジェクト(石巻市支援活動)活動資金の捻出のためにゼミで出来ることとして、2012年から今年の6月までに5回のフラ(ダンス)イベントを開催しました。

概要は、ハワイから著名な音楽家あるいはフラダンサーを招いてイベントを開催し、地域のフラ愛好者参加型による国際交流の実践とハワイ文化の紹介をすることです。5回の開催で計3300名の参加があり、総収益金約160万円をすべて同プロジェクトへ寄付しました。

3年間に5回開催できた要因は次の通りです。

(1)最高のものを提供…長野県では首都圏のようにハイレベルのフラを観ることも著名なミュージシャンの演奏による踊りもなかなか実現出来ません。3回

招聘したミュージシャンのウェルeldonはグラミー賞ノミネート歌手、また第4回に招聘したダンサーは、

フラ世界一を決める大会で優勝しています。

(2)廉価…首都圏では入場料が1万円前後ですが、大学の施設を利用することで入場料2000円(子供は無料)で開催することが可能となりました。

(3)趣旨が明確…松本大学東日本大震災災害支援プロジェクトへの活動支援・国際文化交流・国際文化理解という趣旨を参加者全員に理解してもらいました。

(4)学生が主体…観光を学ぶゼミ生が運営しました。イベントプロデュースの実習にもなります。



(5)営利目的ではない…趣旨を明確にし、チャリティーであり収益金はすべて寄付する旨を明記しました。

地域のフラ愛好者のご協力により継続して開催でき、皆様の浄財を贈ることが出来ました。ここに深く感謝いたします。また石巻市支援活動を続けている学生たちに対して、「彼らは僕たちの誇りです」と表彰後にゼミ生たちが言ってくれたことがとても嬉しいことでした。

(観光ホスピタリティ学科教授 山根 宏文)



エプソンユニオン賞

地域や企業と創った花火大会

地域づくり考房『ゆめ』すずき川花火大会プロジェクト



学生プロジェクト「すずき川花火大会」のメンバーが、エプソンユニオン賞を受賞しました。

今年は12名の学生が、実行委員会の各係(企画・広報・山雅コラボ)に分か

れて楽しく活動しました。企画ではFMラジオのCM制作や生出演、写真絵画コンテスト、広報ではポスター・チラシ制作、さらに松本山雅FCとコラボレーションした抽選会などで花火大会盛り上げに貢献しました。

地域貢献大賞の審査員からは「富士電機との連携が素晴らしい。松本市民の皆様が花火を楽しむことができた」と評価していただきました。

(地域づくり考房『ゆめ』 浅川 三枝子)

ものぐさ太郎賞

「てるてる坊主アート展」

～1つの小さなイベントがまちを変えた～10年間の活動

観光ホスピタリティ学科 山根ゼミ

2006年にアウトキャンパス・スタディで池田町を訪れた際に、①童謡「てるてる坊主」を作詞した浅原六朗先生が池田町出身であることの周知②美しい田園風景を眺められる丘(クラフトパーク)の利用促進③町の知名度アップの3点を観光協会から依頼されました。その課題解決のため、学生たちがクラフトパークにて「てるてる坊主アート展」を開催することになりました。



このイベントによる効果は知名度向上や経済効果などたくさん挙げられますが、最大の効果は、池田町が「日本でも最も美しい村連合」に加盟することが出来たことです。美しい景観と文化振興という2つの厳しい審査を経て、この展覧会が文化振興として認められました。そして加盟により「美しいまちづくり推進計画」が策定され、町民による美しいまちづくり活動が実施されています。

(観光ホスピタリティ学科教授 山根 宏文)

同窓会長賞

楽しく体を動かして、 運動を始めるきっかけ作り!!

地域づくり考房『ゆめ』松本大学キッズスポーツスクール

松本大学キッズスポーツスクールは、こどもの体力低下や人とのつながりが課題とされている今日、子ども達に運動の楽しさを知ってもらい、スポーツを始めるきっかけづくりとなることを願って毎月2回活動しています。学生達は、毎回のテーマを決め、メニューを考え試行錯誤しています。身近なものを活用したり、道具を手作りし



(スポーツ健康学科専任講師 中島 節子)

てお金をかけない工夫もしています。一時は参加者が減少して開催も危ぶまれましたが、広報活動を強化することで、今では申込制になるほど盛況です。学生スタッフも子ども達の元気と笑顔を励みに、出会いと交流を繰り返しながら頑張っています。

後援会長賞

クローン病のメニュー開発 ～製薬会社のホームページへの掲載と試食会の開催～

健康栄養学科 藤岡研究室

藤岡研究室ではこれまで、3年に渡り、みえIBD(炎症性腸疾患)患者会のサポートを行い



ました。今年度は、これまで食事会で提供したメニューが味の素製薬(株)のホームページに、クローン病治療で名高い病院に続いて、日本で3番目に掲載されたこと、メニューの一部を今年度の患者会で試食して頂いたことを、当研究室では初めて3年生が発表しました。

クローン病寛解期の食事は「低脂質・低残渣・低刺激」に調整しますが、実際は患者様によって個人差が大きいので、制限することは最低限にとどめ、食事の選択肢を必要以上に減らさない努力が必要です。そのためにも管理栄養士は、お一人お一人の食事歴と病態との関連をよく調べて、患者様の食事QOLが下がることのないよう努力していくことが求められます。

(健康栄養学科専任講師 藤岡 由美子)

学生委員長賞

健康弁当のメニュー提案

地域健康支援ステーション

健康産業の推進を目的に松本市で開催される「世界健康首都会議」の場で提供する健康弁当を、健康栄養学科の学生有志がメニュー提案しています。この取り組みは平成25年度より始まり今年で3回目となりました。



学生は弁当のコンセプトを設定し、それに合わせた料理や組み合わせなどを検討して弁当メニューの提案をし、商品化のための調整を重ねた後、株式会社王滝が弁当の製造と販売



を行いました。学生はお客様から喜ばれる商品づくりに苦心しましたが、今年の「愛(アイ)ディアあふれる健康弁当」は、会議当日300食が完売しました。

現在は株式会社王滝の商品として、注文販売が行われています。

(地域健康支援ステーション 飯澤 裕美)

大学祭実行委員会賞

とにかく明るい生坂村 ～安心してください、健康ですよ、の変(編)～

スポーツ健康学科 田邊ゼミ

田邊ゼミナールでは、小学生から後期高齢者まで幅広い年代を対象とした健康教室を行っています。その中で、3年前から生坂村在住の中高齢者を対象とした健康教室の企画、運営、指導を行ってきました。

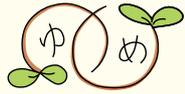
今年度、新たな取り組みとして、生坂村教育委員会からの依頼で、村のケーブルTVで放送する「健康体操の指導番組」の制作を行ったので、地域貢献大賞ではその内容を中心に発表しました。本学の放送部との協同プロジェクトとして、ゼミナールや学部を超えた中で作品を創り上げることができました。身体活動が低下する冬場を中心に放映されます。



(スポーツ健康学科専任講師 田邊 愛子)

〈地域貢献大賞審査員〉

- セイコーエプソン労働組合執行委員 中島 和彦様
- セイコーエプソン労働組合執行委員 石川 直仁様
- 松本市新村公民館長 関 成任様
- 松本大学同窓会長 小島 恵子様
- 松本大学後援会長 田中 潔様
- 松本大学学長 住吉 廣行
- 松本大学全学学生委員会委員長 尻無浜博幸
- 松本大学人間健康学部学生委員主任 吳 泰雄
- 松本大学松商短期大学部学生委員主任 中村 純子



話と和と輪、想像と創造の空間 地域づくり考房『ゆめ』



地域づくり考房『ゆめ』は、学生が大学での学びを活かして地域と連携し、課題解決に向けて主体的に活動することを支援しています。主に4つの取り組み（①学生の関心、問題意識から生まれた企画実践②地域との協働でプロジェクトを企画実践③地域で企画される活動への参加・支援④地域づくり考房『ゆめ』の自主事業）があり、学生たちが積極的に地域づくりにかかわっています。

プロジェクト活動を計画的に進め、『ゆめ』の活性化を目指して！ 『ゆめ合宿』を行いました

地域づくり考房『ゆめ』では、毎年夏休みに、学内で前期の活動の反省と後期活動に向けた研修を行ってきました。今年度は、国立信州高遠青少年自然の家にて、9月7、8日に1泊2日のゆめ合宿を行いました。学生は、プロジェクトなどのグループに所属して活動しています。今回の合宿では、グループ間の親睦を深め、一緒に活動する仲間としてグループを超えた『ゆめ』の新たな活動を模索することを目的の1つとしました。

1日目の最初に、土笛やモザイクキャンドルづくり、溪流釣りなどの体験企画を通して親睦を深めました。プロジェクトで培ってきた



仲間への気配りや支え合う姿を見ることができました。夕方の交流会では、各プロジェクトが交代でアクティビティ企画を行いました。それぞれのプロジェクトの特長を活かし、体を動かす企画、手話を使ったもの、子どもの遊びを取り入れたものなどです。こうしたアクティビティを通じて、自分の所属していないプロジェクトの活動内容を理解し、興味を持つきっかけとなりました。これまでのプロジェクトを通じて参加メンバーを楽しませる技術を身に付けたことなど、成長した姿を見ることができたと思います。

合宿のもう1つの目的は、プロジェクトの活動を計画的に実施していくためのスキルや考え方を学ぶことでした。4月から7月までの活動では「もう少し早く取り組みれば良かった」といった反省が目立ちました。目



標達成のために計画を立てること、計画を立てるためには自分たちの能力を知ることなど、ワークショップをしながら学びました。

最終日はワールドカフェという手法を用いて「これからの『ゆめ』について」話し合いをしました。『ゆめ』の活動がさらに活発になるような意見をたくさん共有することができ、参加した学生は、後期の活動に活かすことができる気づきを得られました。

この合宿で、たくさんの仲間と語りあい、活動の意義を確認しあいました。これからの学生プロジェクト及び『ゆめ』の活動にご期待ください。

(地域づくり考房『ゆめ』運営委員長 廣瀬 豊)

「明るい社会に貢献する奨学生」に学生スタッフが採用されました

公益財団法人信濃育英会の第21回「明るい社会に貢献する学生の奨学制度」に、地域づくり考房『ゆめ』の学生スタッフリーダー・片瀬咲季さん（スポーツ健康学科4年）が採用されました。

この事業は、学業に励むと共にボランティアなどあらゆる分野の活動を通じて、明るい社会に貢献している学生を表彰して奨学金を給付するもので、県内外24名の応募者から片瀬さんを含む9名の学生（個人の部）が採用され、10月3日に信濃



学寮（東京都杉並区）で授与式がありました。

片瀬さんの採用理由として「松本大学の地域づくり考房『ゆめ』の学生スタッフリーダーとして、地域に密着した社会貢献活動を行っている。未就学児を対象にキッズスポーツスクールを実施しているほか、子ども達が職業体験を通じて社会の仕組みを学ぶ仮想のまち『あるはずタウン』を実行委員長として企画した」と紹介されています。

授与式のスピーチで片瀬さんは「学生時代に学んだことを活かし、内定している福祉の現場で働きながら、地域に貢献する活動を続けたい」と決意表明しました。

(地域づくり考房『ゆめ』課長 臼井 健司)

地域の健康づくりを支援する 地域健康支援ステーション



地域健康支援ステーションでは、地域からの依頼を受けて健康づくりの支援やメニュー提案など実践的な活動を行っています。最近の活動をご紹介します。

管理栄養士スタッフ 飯澤 裕美
健康運動指導士スタッフ 赤津 恵子

企業に出向き社員の体力測定と運動指導を実施しました

塩尻市内の企業から、社員の健康管理の一環として簡単な体力測定を実施し、弱点に応じた運動種目を紹介して欲しい旨の依頼を受け、10月23、30日の2日にわたり伺いました。基本的な「握力」「長座体前屈」などのほかに、3分間社屋の周りを歩き、全身持久性体力の測定も行いました。参加者各回20名ほどのうちほとんどは20～30歳代の方でしたが、腹筋のテストをする「上体起こし」に苦戦されている方が多く、運動不足を痛感されていました。全国平均と比べ、自己の劣っている体力を今後トレーニングできるよう、目的別部位別運動種目を体験していただきました。参加者からは、「日頃の運動不足を痛感した」「要介護にならないようこれから筋トレを頑張りたい」等のご感想を、健康管理担当の方からは今回の体力測定が社員の意識改革に繋がったとのお便りをいただきました。



せていただきました。健康寿命を延ばすためには、運動がとても重要であることをお話ししました。参加者が地域のリーダー的存在であることを踏まえ、地域で運動を普及してもらえるよう、効果的かついつでもどこでも簡単にできる運動パターンをいくつか体験していただきました。最近話題のロコモティブシンドロームにも触れ、地域でも広く活用できるよう、参加者38名を代表して2名の方にロコモ度テストを実践してもらいながらテスト方法をお話ししました。参加者の皆様から「地域の体操サロンの種をたくさんもらった」「ロコモ対策の筋トレがこんなに簡単に日常生活の中でできるのが分かり嬉しかった」「気持ちのよい汗をかいた」等の感想をいただきました。



要支援要介護予防の講話と実技を行いました

県松本保健福祉事務所主催の食生活改善推進員リーダー研修会「いきいきヘルスメイト講座」が7月～9月にかけ5回開催され、8月の「日頃の活動に取り入れられる運動方法を学ぶ」という内容の講座を担当さ

「子どもたちへの食育」を実施しました

10月に実施された県立こども病院の病院祭で食育ブースを担当し、食育SATシステムを用いた食事診断を行いました。

たくさん並んだ実物大の料理モデルの中から、子どもたち一人ひとりが自分の食べたい料理を選んでセンサーの上に乗せます。ICチップが組み込まれた料理に反応し自分の選んだ料理の栄養バランスが瞬時に計算され、☆の数で評価が表示されます。☆の数が5点満

学生がアイデア提案したスタめしが販売されました

「松本山雅FC」との共同企画により、健康栄養学科学学生有志が、スタジアム「アルウィン」でのサッカー試合時に来場者へ販売する飲食物（通称：スタめし）の新商品開発を行いました。今回で6回目の活動ですが、松本山雅が1昇格となった今年は37人の学生が「アイデア提案」に挑戦し、ご当地食文化をアピールする商品や山雅必勝の思いを含めた商品など22品のアイデアを学生が提案しました。アイデアを採択してくださった業者と打ち合わせを重ねて最終的に8品が商品化され、商品パッケージやカラフルなPOPも手作りし、9月と10月の販売日にはすべての商品が完売となりました。

自分のアイデアを商品化できた学生たちは苦勞の末の大きな達成感を得ることができ、商品化に至らなかった学生も商品化をめざして考えるという貴重な学びが得られています。

業者の皆様にはお忙しい中、学生への支援とご指導をいただきました。この場をお借りして感謝申し上げます。



点の時には合格の鐘も鳴り響くので、子どもたちは大はしゃぎです。☆の数が2つで落ち込んでしまったお子さんには、学生から結果に応じたアドバイス。「ここに牛乳を加えてみようか」「野菜のおひたしを加えてみようか」。するとたちまち合格点となり笑顔がほころびます。

栄養のことが理解できない小さなお子さんにもゲーム感覚で評価がわかるこのシステムは保護者にも好評で、「おうちの食事も☆5つの食べ方にしようね」などの親子の会話も聞かれました。

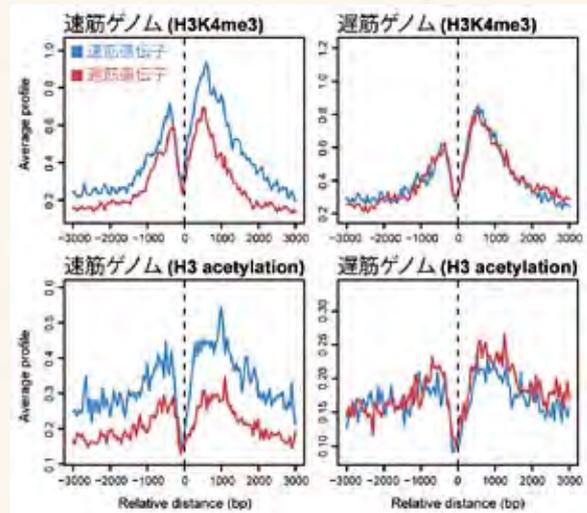
皆さまのお近くで、学生や専門スタッフ（管理栄養士・健康運動指導士）が
お手伝いできることがありましたら、是非お声をかけてください。

骨格筋の研究が米国の生理学雑誌に掲載されました

大学院健康科学研究科 准教授 河野 史倫

骨格筋は、速筋と遅筋に分類されます。遅筋は高いエネルギー代謝能を有するため、生涯の健康という観点からは、遅筋特性の維持・強化が重要です。しかし、骨格筋がどのように遅筋へ変化するのかが、未だ不明な点が多いのも事実です。そこで我々は、速筋と遅筋の遺伝子におけるヒストン修飾解析を、ラットを用いて行い、その結果をアメリカの生理学雑誌「Journal of Applied Physiology」に発表しました。

遺伝子はヒストンに巻きついて核内に折りたたまれています。ヒストンがアセチル化やメチル化を受けると、その部分がほどこけ易くなり、遺伝子を読み出しやすくなることが知られています。今回の研究の結果、速筋で多く発現する遺伝子では、このようなヒストンの修飾が顕著に見られ、速筋に必要な遺伝子は読み出し易い状態にあることが分かりました。しかし、遅筋では多く発現する遺伝子でもヒストンの修飾量が少ないことが明らかになりました。遅筋では、遺伝子がほどこけにくい状態のまま、必要な遺伝子を読みだしていることとなります。このような遺伝子の周囲環境の違いが、遅筋特性を獲得しにくくする原因のひとつだと考えられます。運動によって遅筋特性を獲得する際に、以上のような遺伝子の周囲環境がどのように変化するか、今後の研究によって明らかにしていきたいです。



速筋または遅筋の遺伝子におけるヒストン修飾の分布を、次世代シーケンサーを用いて調べた結果。上段は4番目リジン残基のトリメチル化、下段はアセチル化されたヒストン3の分布を表す。速筋で多く発現する遺伝子(青、約1,000種類の平均)ではこれらの化学修飾が転写開始点(横軸の0)付近で特に顕著に見られるが、遅筋で多く発現する遺伝子(赤、約1,500種類の平均)ではこれらの化学修飾を受けていない。

留学生が日本語スピーチで思いを伝えました

11月13日に松本市のホテルブエナビスタで、松本東ロータリークラブ主催の「第26回留学生による日本語スピーチコンテスト」が開催されました。本学から3名の留学生が応募し、このうち観光ホスピタリティ学科の中国出身、リ・シ



さんが予選を通過し、本選に進みました。

本選にはりさんのほかに信州大学8名、丸の内ビジネス専門学校1名の計10名(男性5名、女性5名)が参加しました。りさんは「日本人の微笑(ほほえみ)」と題してスピーチを行い、日本人の優しさ、微笑みの大切さを紹介し「微笑が人を幸せにしてくれる」と話しました。りさんは、女性の中で唯一入賞し、審査員特別賞を受賞しました。(学生課・国際交流センター 関澤 一洋)

松商短期大学部 平成27年度前期学業成績優秀者を表彰

10月1日、松本大学松商短期大学部「平成27年度前期学業成績優秀者表彰式」を挙行了しました。

この賞は、在学中の学業奨励を目的として特に優秀な成績を修めた学生に授与するもので、今回は平成27年度前期試験の成績上位者として、各学年のトップ10を表彰しました。

トップ10に入るには、100点満



点の各科目において平均で95点以上を獲得する必要があり、そのためには授業での学修、授業外での学修などが大切で、平日頃の努力の成果が表彰という形で表れたと言えます。(教務課 丸山 勝彰)

FD・SD研修会で「ルーブリック評価」学ぶ

9月14日、高知大学総合教育センター大学教育創造部門



講師の俣野秀典氏を招き、「ルーブリック評価スタートアップ～評価の原則から組織での活用まで～」と題したFD・SD研修会を開催しました。

ルーブリックとは評価基準を明示した表のことです。これによって、学生にとっても教員にとっても明確な基準をもって学修到達状況

を把握できますし、それだけでなく、学生にとっては何をどう頑張ればよいのか次の学習の方向性を示す指針となり、自己教育力が育成されるということでした。

大学ではディプロマポリシーやカリキュラムポリシーによって「何ができるようになってほしいのか」を明示することが求められています。参加した多くの教職員に、ルーブリック評価が大切な手法であることが伝わったと思います。

(FD・SD運営部会 川島 均)

嶺南師範学院の4名が本学を訪問

11月2～3日の2日間、本学の協定校である中国の嶺南師範学院の彭叔群副学長以下4名が本学を訪れました。嶺南師範学院とは両学のサマープログラムへの相互参加、本学教員による嶺南師範学院での講義実施など盛んに交流



が図られています。3日の会議では今後の更なる交流や事業の打ち合わせを行い、協定校として相互交流をさらに進めることを確認しました。その後学内を視察し、整った施設や環境の良さ、まわりの山々や自然の豊かさにも驚いていらっしゃいました。その後松本城と、開催していた市民祭を訪れ、武者行列を見たり野点を体験したりして、秋晴れのひと時を楽しんで松本を後にされました。(学生課・国際交流センター 関澤 一洋)

快挙!女子バスケットボール部、女子バドミントン部優勝! 第21回長野県私立短期大学体育大会

夏休みも終わりに近づいた9月11日、第21回長野県私立短期大学体育大会が上田市内で開催されました。本学からは3つの部より



女子22名が参加し、女子バスケットボール部、女子バドミントン部が優勝、女子バレー部も健闘という素晴らしい結果を残しました。私が引率し

た女子バドミントン部は全員1年生でしたが、お互いのプレーに助言をしたり、励ましたりして、見事、優勝を飾りました。優勝杯を手にした選手らの誇らしげな姿が印象的でした。

本学は全国私立短大体育大会でも好成績を収めており、部活動は盛り上がりが見られます。しかし、一方で男子部員の人数不足から男子チームは出場が叶わない状況が続いており、残念です。本大会は県内の8つの短大が参加し、各校が順番で主幹校となり、開催されます。今後も学生が生き生きと活躍するこのような大会の灯を消さぬように、8つの私立短大が一致協力していかなければと思います。

(松商短期大学部学生委員 中村 純子)

硬式野球部

新しい春に向けて刺激を受けた 「少年野球教室」

硬式野球部は11月29日に松本市野球場において、中信地区リトルリーグ指導者会と共に松本・安曇野地域のリトルリーグの選手を対象とした少年野球教室を開催しました。昨年の教室が好評だったこともあり、今年は160名の子供たちが参加し、1、2年生の部員18名が指導しました。練習メニューは事前にグループワークを行って準備し、「手つなぎ鬼」など子どもをリラックスさせるメニューも取り入れ、グラウンドは子どもたちの元気な声に包まれました。本年度の秋季リーグは不本意な成績に終わった硬式野球部ですが、何にでも真剣で純粋な子どもの姿にすっかり刺激を受けました。「これから始まる長く厳しい冬の練習にも積極的に取り組める元気をもらった」という学生の言葉もあり、反転攻勢のきっかけになりました。今後とも応援のほど宜しくお願いいたします。(硬式野球部部長 白戸 洋)



スキー部

スキージャンプの岩淵香里さん、全日本選手権2位



10月31日、札幌市で開催されたノルディックスキー・ジャンプの全日本選手権で、スポーツ健康学科4年の岩淵香里さんが2位になりました。優勝した高梨沙羅さん(写真中央)には及ばなかったものの、久々に伊藤有希さん(写真右)を退けた見事な結果でした。今夏は、来季から加入する北野建設の男子選手

たちと合同トレーニングを積んできており、その成果が徐々に出てきているようです。岩淵さんは、「今回は条件も味方につけることができ、2位になることができました。夏の練習の成果を実感していますが、トップとの差はまだあるので、引き続き一番を狙って頑張っていきたいです」と今後の抱負を述べていました。

今シーズンも、全日本のメンバーとしてW杯を転戦することになっており、先日、最初の遠征先のリレハンメル(ノルウェー)へ向かいました。「W杯でも表彰台を目指して頑張りますので応援よろしくお願いします。」(本人談)大学生活で最後のシーズン、さらなる飛躍に期待しながら朗報を待ちたいと思います。(スキー部部長 齊藤 茂)

陸上競技部

今シーズンを振り返って

今シーズンの活動を振り返ってみますと、9月に大阪市で開催された「第84回日本学生陸上競技対校選手権大会」に、浦野泰希君(観光ホスピタリティ学科3年)が男子400mで、瀧澤祐未さん(スポーツ健康学科4年)が女子100mと200mの2種目で出場。とりわけ瀧澤さんは200mで準決勝まで進出し、全国の舞台でも力を発揮してくれました。

同じく9月に松本市で開催された、長野

県No.1アスリートを決める「第68回長野県陸上競技選手権大会」では、男女40種目中8種目で優勝を飾る活躍を見せてくれました。特にリレーでは、昨年同様男女4種目中3種目を制し、男子1600mリレーは4連覇、女子1600mリレーは2連覇を達成しました。

また、今年は地域の小・中学生を対象とした陸上教室を定期的で開催したり、地元のリトルリーグ(野球)の子供たちへ陸上の指導をしたりと、部員たちが積極的に地域社会に出て貢献する姿が数多く見られ



ました。今後も「感謝」「謙虚」「奉仕」の3つの気持ちを忘れずに記録や結果も大切ですが、「人間力の向上」を目指し活動していきたいと思っています。

(陸上競技部顧問 白澤 聖樹)

アイデンティティ

総合経営学科 教授 林 昌孝

ある企業の社長さんの話を聞く機会があり、その中から印象深い話を紹介します。

「ゴルフというスポーツは、特にアマチュアの場合は、スキルに応じてハンディが与えられたり、新ペリアなどの方法で成績の補正がされるので、参加者全員に優勝達成への希望が与えられるようにできています。したがって、心理的に平等感が湧いてきます。ゴルフは、職業や地位、男女問わずプレーします。同じような道具を使い、ハンディさえ貰えばどこか対等になりゲームができます。そうなるとうまな人がエライという理屈が成

り立ってくると説明する人もいます。一方、資本主義社会の精神は、『努力・創造・勤勉・禁欲』という論理的価値観をベースに成立しているものであるとある社会学者が論じています。しかしながら、実際の社会はこれとは全く逆で、努力や勤勉の成果は報われず、マネーゲームなどの手段で選ばぬ不公平な競争を生み、大きな経済格差が生じて不安定な社会を形成しています…」

「ピケティの『21世紀の資本論』によると、『資本収益率(R)は経済成長率(g)よりも大きい』という実証的理論で現代社会の不平等さを説明しています。この理論に類似した思考として、一般的に『代表選手のスピリット(S)は、一般選手やアマチュアのそれ(g)より大きい』と言われていています。この理論に基づきスポーツのみならず、結果として成果において大きな格差が生じてきます…」

私が感動したのは、この社長さんが自分なりに現象や理論をとらえ、吸収して自分のものになっていることです。レトリックが適切かどうかは別として、社会で起きている事象を理解して応用しようとする姿勢は流石であると感じました。今さらのように言われていることですが、「自分の頭で考える。行動する。」ことの大切さを新鮮な感覚で認識した次第です。

私が感動したのは、この社長さんが自分なりに現象や理論をとらえ、吸収して自分のものになっていることです。レトリックが適切かどうかは別として、社会で起きている事象を理解して応用しようとする姿勢は流石であると感じました。今さらのように言われていることですが、「自分の頭で考える。行動する。」ことの大切さを新鮮な感覚で認識した次第です。

2016年度 入試日程

■ 総合経営学部 (総合経営学科・観光ホスピタリティ学科/各学科 定員80名)

試験区分	募集人員		会場等	出願期間	試験日	合格発表日	手続締切日
	総合経営	観光ホスピタリティ					
一般	一般A	15	松本大学・東京・名古屋・新潟・甲府・那覇	1月 12日 (火) ~ 1月 26日 (火)	2月 2日 (火) 2月 3日 (水)	2月 10日 (水)	2月 24日 (水)
	一般B	3	松本大学	2月 4日 (木) ~ 2月 15日 (月)	2月 19日 (金)	2月 25日 (木)	3月 10日 (木)
	一般C	2	松本大学	2月 23日 (火) ~ 3月 7日 (月)	3月 11日 (金)	3月 14日 (月)	3月 28日 (月)
センター	センター利用Ⅰ期	6	松本大学	1月 12日 (火) ~ 2月 3日 (水)	2月 10日 (水)	2月 24日 (水)	2月 24日 (水)
	センター利用Ⅱ期	2	松本大学	2月 4日 (木) ~ 2月 17日 (水)	2月 25日 (木)	3月 10日 (木)	3月 10日 (木)
	センター利用Ⅲ期	2	松本大学	2月 23日 (火) ~ 3月 9日 (水)	3月 14日 (月)	3月 28日 (月)	3月 28日 (月)
その他	留学生後期	若干	松本大学	2月 1日 (月) ~ 2月 15日 (月)	2月 19日 (金)	2月 25日 (木)	3月 10日 (木)
	編入学Ⅲ期	2	松本大学	2月 1日 (月) ~ 2月 15日 (月)	2月 19日 (金)	2月 25日 (木)	3月 10日 (木)

■ 人間健康学部 (健康栄養学科・スポーツ健康学科/各学科 定員80名)

試験区分	募集人員		会場等	出願期間	試験日	合格発表日	手続締切日
	健康栄養	スポーツ健康					
一般	一般A	20	松本大学・東京・名古屋・新潟・甲府・那覇	1月 12日 (火) ~ 1月 26日 (火)	2月 2日 (火) 2月 3日 (水)	2月 10日 (水)	2月 24日 (水)
	一般B	3	松本大学	2月 4日 (木) ~ 2月 15日 (月)	2月 19日 (金)	2月 25日 (木)	3月 10日 (木)
	一般C	2	松本大学	2月 23日 (火) ~ 3月 7日 (月)	3月 11日 (金)	3月 14日 (月)	3月 28日 (月)
センター	センター利用Ⅰ期	10	松本大学	1月 12日 (火) ~ 2月 3日 (水)	2月 10日 (水)	2月 24日 (水)	2月 24日 (水)
	センター利用Ⅱ期	3	松本大学	2月 4日 (木) ~ 2月 17日 (水)	2月 25日 (木)	3月 10日 (木)	3月 10日 (木)
	センター利用Ⅲ期	3	松本大学	2月 23日 (火) ~ 3月 9日 (水)	3月 14日 (月)	3月 28日 (月)	3月 28日 (月)

■ 松商短期大学部 (商学科・経営情報学科/各学科 定員100名)

試験区分	募集人員		会場等	出願期間	試験日	合格発表日	手続締切日
	商	経営情報					
一般	一般A	6	松本大学・東京・名古屋・新潟・甲府・那覇	1月 12日 (火) ~ 1月 26日 (火)	2月 2日 (火)	2月 10日 (水)	2月 24日 (水)
	一般B	2	松本大学	2月 15日 (月) ~ 2月 29日 (月)	3月 4日 (金)	3月 10日 (木)	3月 17日 (木)
	一般C	2	松本大学	3月 7日 (月) ~ 3月 15日 (火)	3月 17日 (金)	3月 22日 (火)	3月 28日 (月)
センター	センター利用Ⅰ期	6	松本大学	1月 12日 (火) ~ 2月 3日 (水)	2月 10日 (水)	2月 24日 (水)	2月 24日 (水)
	センター利用Ⅱ期	2	松本大学	2月 15日 (月) ~ 3月 2日 (水)	3月 10日 (木)	3月 17日 (木)	3月 17日 (木)
	センター利用Ⅲ期	2	松本大学	3月 7日 (月) ~ 3月 15日 (火)	3月 22日 (火)	3月 28日 (月)	3月 28日 (月)
その他	留学生後期	若干	松本大学	2月 1日 (月) ~ 2月 15日 (月)	2月 19日 (金)	2月 25日 (木)	3月 10日 (木)

■ 松本大学大学院健康科学研究科健康科学専攻 (一般・社会人共通)

試験区分	募集人員	会場等	出願期間	試験日	合格発表日	手続締切日
大学院 後期	3	松本大学	1月 12日 (火) ~ 1月 26日 (火)	2月 3日 (水)	2月 10日 (水)	2月 24日 (水)

WEB出願割引

一般入試・センター利用入試限定

松本大学では、2016年度入試からWEB出願を実施しています。WEBを利用すると、一般入試及びセンター試験利用入試の受験料が1出願につき3,000円割引でお得です。一般+センターの併願受験をする場合は6,000円もの割引となります。

ご相談内容は何でもOK! 入試相談会

入試、学費、奨学金、大学・短大の学びについて、学生生活など何でもご相談ください。個別に対応いたします。保護者の方もお気軽にご参加ください。

【日時】2016年1月21日(木)、22日(金) 10:00~15:00

春のオープンキャンパス開催!

【日時】2016年3月21日(祝) 10:30~16:00



詳しくはホームページでご確認いただくか、入試広報室までお問合わせください。

www.matsumoto-u.ac.jp ☎0120-507-200

編集後記

首都圏で生活している若者に将来について聞いたところ、約半数が「将来的には田舎で暮らしたいと思う」との結果が出たそうだ。1ターン、Uターンそれに最近「孫ターン」というのがあるらしい。都会で生まれ育った若者が祖父、祖母のいる田舎へ移り住むというものだ。土地や家はあるので心配はないものの、やはり生活するには仕事や結婚、子育て、教育などの課題が出てくる。地方の時代、地方創生というならば国も各自治体も魅力ある地域づくりに今一番必要なのは何かを真剣に考える必要がある。子供が増え、暮らしやすい環境とは。首都圏に出る若者を減らすことも重要だが、今、この地域で生活している我々がイキイキとした暮らしをアピールすることがもっと重要ではないだろうか。地域づくりを実践する大学として、「魅力ある地域とは」、更に研究し貢献できる2016年にしたい。(記・入試広報室長 中村 文重)

